

「～が～できる¹」と「～を～できる」について

田村 泰男

0. はじめに

一般に他動詞構文においては、直接目的語（以下目的語と表記）は対格助詞「を」を伴って表層化されるが、当該の動詞が可能形になった場合は、目的語は常に「を」によって表わされるとは限らず、主格助詞「が」によって表わすこともできる。

- (1) 太郎は 中国語を 話す。
- (2) 花子は 実力を 発揮した。
- (1') 太郎は 中国語を／が 話せる。
- (2') 花子は 実力を／が 発揮できた。

このように目的語が「が」をとり得るのは、可能文中の述語が状態述語だからであり²、「好き」「動詞+たい」といった述語と共起する目的語にも同じような現象がみられる。勿論、可能の動詞といっても「できる」「わかる」等のようにほとんどの場合、目的語が「が」によって表わされるものもあるが、「～れる／られる³」「～できる」などの場合、目的語は「が」または「を」のどちらかによって表層化される⁴。つまり、可能表現においては、基本的には、目的語をマークするのに、どちらの格助詞を用いてもよいとされているのである。しかし果たしてこれらの構文において目的語マーカの選択は任意なのだろうか。少なくとも、動詞の語彙の意味や構文に関して両者にはなんらかの差異があると筆者には思われる。

そこで本稿では可能表現の中でも特に「～できる」の場合を取り上げ、目的語マーカが「が」の場合と「を」の場合で両者の間にどのような違い、或は傾向があるかを、動詞を中心に、調査・分析していこうと思う。

本稿で資料として用いたものは、平成4年3月及び4月の朝日新聞本紙58日分（広告を除く）と次にあげる小説である。

人間万事塞翁が丙午（青島幸男）、夜と霧の隅で（北杜夫）、白い人・黄色い人（遠藤周作）、二十一歳の父（曾野綾子）、砂の女（安部公房）、江分利満氏の優雅な生活（山口瞳）、狐銃・闘牛（井上靖）、寝台特急18時56分の死角（津村秀介）、新オリエント急行殺人事件（森村誠一）、点と線（松本清張）、急行もがみ殺人事件・寝台特急「北陸」殺人事件（西村京太郎）、多摩湖畔殺人事件（内田康夫）、卑弥呼殺人事件（阿井渉介）、京都新婚旅行殺人事件・京都葵祭殺人事件（山村美紗）、黒白の旅路（夏樹静子）、鎌倉薪能殺人事件

件（斎藤栄）、器に非ず（清水一行）、黒パン俘虜記（胡桃沢耕史）、縦走路（新田次郎）、修羅の峠（西村寿行）、餓鬼岳の殺意（太田蘭三）、悪魔岬（笹沢左保）、広き迷路（三浦綾子）、連笑・ぼくの猿ぼくの猫・百・永日（色川武大）、越前竹人形・雁の寺（水上勉）、能師の妻・野辺の露・宵待草夜情・花虐の賦・未完の盛装（連城三紀彦）、逃げる・乾いた肌・嘘・宣告・来雑遺留品・娘の手・楽しい財産・不吉な遺産・告発手記・白い死体（佐野洋）、仮釈放（吉村昭）、北都物語（渡辺淳一）、総会屋錦城・輸出・メイドインジャパン・浮上・社長室・事故専務・プロペラ機着陸待て（城山三郎）、幼児狩り・劇場・堀の中・雪・蟹・夜を往く（河野多恵子）、死者の奢・他人の足・飼育・人間の羊・不意の啞・戦いの今日（大江健三郎）

1. 用例の総数

収集した用例を目的語マーカー別にみたものが（表1）である。なお本稿は目的語を表示する格助詞の違いによってこの構文をみていこうとするものである。目的語が明示されていないものや、目的語が係助詞「は」や「も」を伴う場合は分析の対象としない。

（表1）

	が	を	計
新聞	186 例	373 例	559 例
小説	77 例	78 例	155 例
計	263 例	451 例	714 例

（表1）から明らかなように、「が」と「を」の現れる割合は、小説ではほぼ1：1であるのに対して、新聞では約1：2となっている。このことは資料体によっても格助詞出現の傾向が異なってくることを示している。

次に、動詞の異なり語数を見てみよう。

（表2）

	が	を	がを両方
新聞	33	168	36
小説	27	47	10

動詞個々を見た場合、「が」よりも「を」を目的語マーカーとして用いる動詞が多く、このことは新聞においてより顕著である。

2. 「～できる」の意味的特徴

ここではまず動詞ごとにみた場合の、用例数の多いもの（5例以上用例があるもの）を上位から挙げ、「が」「を」の使い分けと動詞の語彙的意味との関係をみていこう。

(表3)

	が	を	計
理解できる	33	14	47
期待できる	37	6	43
確保できる	11	15	26
発揮できる	5	13	18
確認できる	9	7	16
達成できる	6	10	16
維持できる	5	10	15
実現できる	10	4	14
証明できる	3	8	11
納得できる	10	0	10
入手できる	7	2	9
表現できる	2	7	9
実感できる	3	5	8
信用できる	8	0	8

	が	を	計
選択できる	1	7	8
識別できる	3	4	7
説明できる	5	2	7
想像できる	4	3	7
無視できる	1	6	7
解決できる	4	2	6
獲得できる	1	5	6
把握できる	4	2	6
利用できる	0	6	6
回収できる	1	4	5
説得できる	0	5	5
調達できる	0	5	5
特定できる	4	1	5
要請できる	0	5	5
推定できる	3	2	5

「～できる」の語彙的意味と格助詞選択の関係から指摘できることは、「理解できる」「期待できる」「納得できる」「信用できる」などの思考・感覚動詞の可能形の場合、目的語マーカーとして「が」が用いられる傾向にあるということである。これは「～られる」における思考動詞・感覚動詞の傾向と同じと言える。

その他の動詞は基本的には「を」が優勢と言えそうであるが、「実現できる」：「達成できる」や「入手できる」：「獲得できる」／「調達できる」のように、似通った意味でありながら、格助詞の選択に逆の傾向がみられる動詞もあり、さらに用例を加えて検討する必要があるようである。

なお、「アピールできる」「キャッチできる」のような「英語からの借用語+できる」という用例が15例あったが、その全ての用例において目的語は「を」で表示されている。

3. 「～できる」構文における主語

ここでは、主語（能力の持ち主）が表示されているか、表示されているのならどんな助詞をともなって表層化されているかを見てみよう。なお、例文(3)のように「～できる」が従属節（連体修飾節）の中にあり、その従属節中で主節と同じ主語が省略されているような用例は当然ながら除いた。

(3) 米川は則子を直接恐喝できる立場にいた。(新オリエント急行殺人事件)

(表4)

目的語	が					を				
	が	は	に	には	にも	が	は	に	には	にも
新聞	0	1	1	2	1	39	30	0	0	0
小説	0	5	1	11	3	6	13	0	1	0
計	0	6	2	13	4	45	43	0	1	0

(表4) から明らかなように、目的語が「が」でマークされる場合と「を」でマークされる場合では、主語の出現に関して違いが認められる。目的語が「が」でマークされる場合は与格主語が現われることが多く、主格主語は今回の調査では現われなかった。逆に、目的語が「を」でマークされる場合は、主語は主格で現われるかまたは主題化されて「は」を伴って現われることが多く、与格主語は1例しか現われなかった。

このことから、「～できる」構文において、主語が表層構造に現われるときは次のような構造で表層化されると認定できそうである。

[主語] に [目的語] が ～できる。

[主語] が [目的語] を ～できる。

つまり「～できる」構文においては、主格助詞「が」は1つしか現われず⁵、主語マーカーとして「が」が現われるときは目的語マーカーとしての「が」は現われず、目的語マーカーとして「が」が用いられるときは、主語マーカーとしての「が」は現われないのである。

また、これは新聞の場合特に顕著なことであるが、目的語が「が」でマークされる時は主語が表層において現われないことが多い。

4. 目的語にみられる特徴

本稿では目的語そのものについても調査を行ってみたが⁶、目的語の文法的・意味的特徴から傾向を指摘できそうなのは、目的語が連体修飾節に続く形式名詞「こと」の場合である。即ち、目的語が「こと」の場合は「が」によってマークされる傾向にあるということである。なお、同様に形式名詞「の」も、用例は少ないが、傾向としては「こと」と同じようである。

「こと」

(表5) 「の」

(表6)

	が	を
新聞	7	3
小説	8	3
計	15	6

	が	を
新聞	2	1
小説	2	0
計	4	1

なお、目的語が「～できる」の直前にあるか、或は間に他の文要素を含むかどうかについても調べてみたが(表7)、目的語と動詞の位置関係からは特徴は指摘できそうにない。

(表7)

	直前にある場合		直前にない場合	
	が	を	が	を
新聞	145	283	41	90
小説	49	59	28	19
計	194	342	69	109

5. 節の独立度・従属度と目的語マーカとの関係

ここでは先ず「～できる」の語形からみた場合の「が」「を」の使い分けを見てみよう(表8)。ここにあげた「～できる」「～できない」「～できた」「～できなかった」はいずれも言い切りの形で文中に現われた場合の数値であるが、これには二つの用法が含まれている。すなわち次に句点が続き文を閉じる用法と他の文要素へ続いていく用法である。そこで次に、それぞれの語形が文を閉じている場合及び他の文要素へ続いていく場合—ここでは実質名詞へかかる連体修飾節を構成する場合を例に—をみてみよう(表9)。

(表9) からわかることは、これらの述語が文を閉じている場合—つまり単文中または

(表8)

	が	を
できる	125	274
できない	41	64
できた	28	30
できなかった	19	29
その他	50	54
計	263	451

(表9)

	文を閉じる		実質名詞が後接	
	が	を	が	を
できる	25	36	14	77
できない	9	9	6	18
できた	6	5	2	1
できなかった	9	13	2	5
計	49	63	24	101

複文の主節中に位置する終止形の場合—目的語マーカーとしての「が」「を」の選択はゆれているのに対して、連体修飾節中でこれらの述語が使われる場合は、その目的語は「を」でマークされることが多いということである。言い換えれば、単文中や独立度の高い節の中では目的語マーカーとしての格助詞の選択はゆれているが、独立度の低い節の中では「を」が使われる傾向にあると言えるのではなからうか。このことを検証するために「～できる」形の場合を調べてみた(表10)。

(表10) からわかるように、①「～できる」が実質名詞にかかる場合—即ち連体修飾節中の述語用言である場合—②「～できる」が形式名詞「こと」「の」にかかる場合③「～できる」に疑問の終助詞「か(どうか)」が接続する場合においては、「～できる」の目的語は「を」でマークされることが多い。なお②③のように「の」「こと」「か」によって受けとめられて、全体が名詞化したものは準体節⁷とも呼ばれ①に準ずるものとして考えてよいであろう。

また④「～できる」が文を閉じる場合—即ち終止形本来の用法である場合—及び⑤「～できる」に引用の「と」が接続する場合は、上記の連体修飾節などに比して目的語をマー

(表10)

		が	を
文を閉じる		25	36
後接する語	実質名詞	14	77
	こと	2	7
	の	1	9
	よう(に)	16	35
	か	6	16
	かどうか	3	12
	と	26	36

<注1> 「のだ」「のか」「のです」類は含めない。

<注2> 「よう(に)」「か」「かどうか」「と」の後に主節が続く場合のみ。

<注3> 「とのN」「というN」など引用節が連体的に使われた場合も含む。

クする格助詞にゆれがみられる。

引用節は、言うまでもなく節の中でも独立度が高く「文」にいちばん近い⁸。逆に連体修飾節や準体節の場合は独立度が低く、主節に対する従属度が高い。これらのことから、文に近い節ほど目的語をマークする格助詞はゆれやすく、逆に従属度の高い節中における目的語は「を」でマークされる傾向にあると言えそうである。

なお、その他の語形についても考察を行う必要はあるが、個々の用例数が乏しいため、詳細については今後の課題としたい。

6. おわりに

最後に以上の調査から明らかになったことを記し、本稿のまとめとしたい。

- (1) 動詞個々を見た場合、目的語マーカーとして「が」をとる動詞よりも「を」をとる動詞が多い。
- (2) 資料体によっても格助詞選択の傾向が異なっている。
- (3) 思考・感覚動詞の場合、目的語は「が」でマークされることが多い。
- (4) 「～できる」構文において主語と目的語が表層化されるときは、次のような構造をとる。
 [主語]に(は) [目的語]が～できる。
 [主語]が [目的語]を～できる。
- (5) 単文中や独立度の高い節中では目的語マーカーとしての格助詞「が」「を」の選択はゆれる傾向にあるのに対して、従属度の高い節中では目的語は「を」でマークされる傾向にある。

(主要参考文献)

- 井島正博 「可能文の多層的分析」(『日本語のヴォイスと他動性』1991年 くろしお出版)
寺村秀夫 「日本語における単文、複文認定の問題」(『寺村秀夫論文集 I』1992年
くろしお出版)
久野 暲 『日本文法研究』 1973年 大修館書店
柴谷方良 『日本語の分析』 1978年 大修館書店
角田太作 『世界の言語と日本語』 1991年 くろしお出版
寺村秀夫 『日本語のシンタクスと意味 I』 1982年 くろしお出版

(注)

1. ここでいう「～できる」は「理解する」「達成する」に対する「理解できる」「達成できる」のように基本的には「～する」の可能形をさす。次の例のように「できる」が前に名詞句をとらず単独で用いられるものは本稿では取り扱わない。
eg. 彼はテニスができる。
2. cf. 柴谷 p.236、井島 pp.152-153.
3. 「られる」形をとるもののうち、「考えられる」「信じられる」「感じられる」等の思考・感覚を表わす動詞は目的語が「が」でマークされることが多いようである。
4. ここでいう「目的語」とは統語範疇における用語であり、意味レベルでは「対象(格)」というべきものである。
5. cf. 柴谷 pp.234-235、井島 p.150.
6. 目的語が+human である場合も調査してみたが、(表1)で挙げた用例の比率と比べて特に目立った傾向は認められない。

	が	を
新聞	7	20
小説	7	8
計	14	28

7. cf. 寺村(1992) p.109.
8. cf. 同上